

朝鮮石人像を訪ねて (33)

深田 晃二

今回は通信238号(訪ねて7)と259号(訪ねて27)で報告した上野の東京国立博物館を再訪する事が出来たので新しい状況を報告する。また通信265号(訪ねて31)の奈良西ノ京の公園も訪れたので記事の補強を行う。

★ 東京国立博物館 ★

通信 259 号(訪ねて 27)で石人像や望柱石が博物館裏庭に放置されているという記事を書いた。その文の最後に、無神経に扱っているのではないかとの疑念と共に、「あるいはこの状態は一時的なもので、撮影から既に5年が経っているので、改善されて現在は本来の姿で展示してあるのだろうか。」と書いた。今年10月初旬(2014/10/7)に東京国立博物館を再訪できたので、6年目の状態を確認してきた。



2008/8/25 東洋館屋外 文人像

文人像についてはどうか。6年前は立ててあるのは左の写真(同一像)の1体だけであった。現在は横に並んで2体、道を隔てて石羊と向かい合う様に立てられている。

文人像は TC-130 と



2014/10/7 文人像(江原道)

TC-131、石羊にはTC-132とTC-133の資料番号が振られ、どちらも江原道(18~19世紀)の物と書いた案内板がある。

次に、6年前には横たわっていた文人像はどうか。



2014/10/7 文人像(平壤)

比較的彫りの浅い文人像2体も同じ空間に立ててある。多分これらが寝せてあった物であろう。但し、この2体には由来が明確ではないからか資料番号が付けてなく、「伝 朝鮮平壤(18~19世紀)新田愛祐(aisuke)氏寄贈」とだけ案内板に書いてある。



2014/10/7

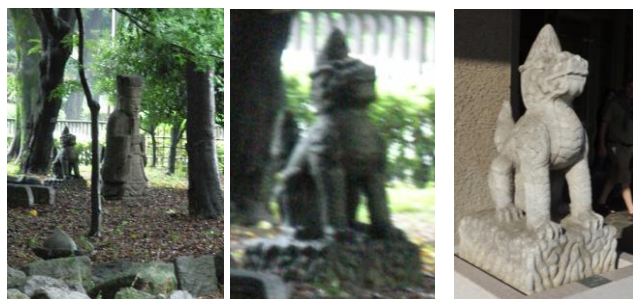
本館側から入門ゲート側を見たのが上の写真で、左2体が平壤石像、真ん中が江原道の石像2体、道を挟んで右端が石羊2体である。

結論的には6年前は一時的な仮置き状態だったことになる。博物館の処置(放置)にクレームを付けたことは結果的に嬉しい誤解だった様である。

望柱石や長明灯は現在も屋外で横たえてあるがいつの日か正式に立てて



2014/10/7



2008/8/25 東洋館屋外 拡大図 2014/10/7 東洋館入口脇

まず上の写真を見て頂きたい。左2枚は6年前の屋外(隠れているが獅子様の石造物は2体あった)、右は今年の東洋館入口に設置された石造物である(両サイドに2体設置してある)。館内の案内人に聞くとこの石造物は中国から来た物との事であった。



2008/8/25 東洋館屋外 石羊



2014/10/7 本館南屋外 石羊

石羊についても現在は同様に正面入門ゲートから本館へ向う道沿いに目に付く様に設置されている。

展示設置されることを望むものである。

★ 奈良西ノ京の柏木公園 ★

通信258号(訪ねて26)で2013/4/20の掛陵訪問記を書いたが、現地の日本語案内板の内容をここで紹介する。

掛陵石造および石柱一括

宝物： 第1427号

所在地：慶尚北道 慶州市 外東邑 掛陵里 山17

掛陵は、周辺の石物配置や造成技法などに優れ、統一新羅時代の王陵の中で最も発達した陵墓様式を持つとされる。

王陵の入口には、南から華表石・武人石・文人石がそれぞれ1対あり、さらに4頭の石獅子が配置されている。これらは東西に約28メートル離れて向かい合っている。

武人石は、写実的で塊量感に富んでいる。顔には西域人の特徴がよく表れており、統一新羅が西域との盛んな文物交流を行っていたことを示している。文人石も他の陵墓の文人石とは違い、たくましさ、強健さが印象的である。

石獅子は2頭ずつ向かい合い、東南と西北の対が正面を、西南・東北の対がそれぞれ頭を右に向け、南北を守るといった配置である。4頭ともに自信に満ちた笑みをたたえているが、特に北を守る獅子の生動感あふれる姿は、見る人を感嘆させる。

これらの石造物は、掛陵の封土の周囲にある十二支神像と共に、8世紀末の新羅人の文化的独創性、芸術的感覚を代表する優れた作品である。

通信265号(訪ねて31)で紹介した奈良の柏木公園の慶州掛陵のレプリカ石人像を2014/11/24に訪問した。

近鉄西大寺駅から南へ延びる近鉄橿原線西ノ京駅は薬師寺や唐招提寺の最寄り駅であるが、今回は柏木公園だけを目標にして降り立った。



「胸に手を付けた武人は忠誠を誓う姿態である」とする金巴望氏の意見を(訪ねて31)で紹介した。ここでは右手に鬼の金棒の様な突起のある剣を持つ武人像が東に一体、左手に剣を持つ一体が西に設置されている。



奈良

慶州と同様に2体向かい合わせに配置されているが、本墳は慶州とは反対の南にある想定のようなようである。本墳に向か



慶州

奈良

おうとする人の側に剣を持ち、厳しい顔をそちらに向けて反対の手は握りしめた拳を胸に当てていて、忠誠を誓うというより侵入者を威嚇するように見える。



慶州



奈良



慶州



奈良

「長い巻き毛をヘアバンドで止めている」(金巴望氏)と言うことなので、後頭の比較をしてみる。



慶州



奈良

鎧の威しの様な冑(かぶと)を鉢巻の様なヘアバンドで後でキリリと締めているのが奈良の像でよく分かる。

左手に剣を持つ像の後姿の比較が下の写真である。特徴である右腰の巾着袋は同じように付けているのが



慶州



奈良

分かる。像の高さは奈良の方が少し大きいようである。奈良の写真は高圧電線が背景を邪魔している。(続)